

どなたにも、九段のどこかに好みのところがあるかと思われるが、私の好みは高いところにある。その一は前期課程用だった頃の富士見校舎の、昼休みに開放された屋上からの眺め。(そこには、ある熱心な先生と生徒たちによる「屋上ビオトープ」もあるのだった。)

その二は体育館棟グランド側の外階段。昇るほど開放感が高まり、多目的ホール脇にあたる最上部からのグランドと富士見校舎の眺めが良い。

しかしなんといっても最高なのは天文台だ。ドーム内の望遠鏡システムのすばらしさはもちろんだが、眺めを楽しむなら、さらに上階のドームの外。眼下が透ける網目の鉄階段を昇り詰るとドーム天蓋の周囲に立つことができる。そこは文字通り九段最高の場所である。とくに南の眺めが良い。

「都の中央」の本校では、街の灯りや空気のごれなど、「都の塵」の中での天体観望にハンディが懸念されそうだが、専門家によれば存外そうでもないそうだ。オフィスや学校が多く、昼間にくらべ夜の夜間人口はごく少なくなるためか、観望環境として悪くないとのことだ。私にも冬の真夜中、南の地平にカノープス（東京では見ることの難しい星）を探した中学時代がある。南天がひらけていると星を見る楽しみは広がる思いがした。

なぜ九段の天文台から南の眺めが良いのか。答えを5歳の女の子風に言えば「昔、そこに川が流れていたから。」となる。靖国神社境内、北の丸公園、そして皇居と、南から南南東にかけて、遮る高い建造物がない。しかもほぼ南にあるのは、もとは川だったという千鳥ヶ淵なのだ。

地形図を見れば明らかで、実際に歩いてよくわかるが、千代田区の山の手、旧麴町区は起伏がけっこう大きい。三番町の東郷公園は南に下る地形、隣接の九段小は東に向かう谷筋に建っている。またさらに南の麴町小に行くにも、もう一つの谷筋が東に向かうところを下って昇る。それらが、もとは川として地表を流れていたのを、十七世紀の昔、北の丸造営の際に溜めてできたのが千鳥ヶ淵であるという。数百メートルにわたる南北に深い淵。この先も、南が遮られることのないところに、天文台はあるのだ。

江戸末期の地図を見ると、九段の坂上に東側から「渋江元順」「渋川孫太郎」二人の名が幕府からの拝借地、預かり地としてならんでいる。現在の九段坂上k sビル（元理科大校舎）とその上の園地あたりである。渋江元順が預かっているところには「御薬園」とある。本草学者渋江高伯の末裔だった。(森鷗外の『渋江抽斎』(医師を描いた史伝)とは無関係のようだ。)

渋川孫太郎敬典（よしのり）は江戸幕府最後の天文方（てんもんかた）の学者だった。この地に司天台（今でいう天文台）があったのだ。小説『天地明察』（沖方丁）の主人公渋川春海の末である。天文方の主な役割は、月と太陽の動きで暦を算定すること。もともと浅草など数カ所にあったが、天保年間になってここにも建てられたのは、天保暦という新しい算定基準がたてられたことによるのか、と勝手に推測するが、ここが観測の適地だったことは想像がつく。

今よりはるかに急坂だった九段の上は月見の名所だった。両国の花火も見物できたという。武蔵野台地の東端は、かなりの高低差をつくってまさに「東に見渡す青海長く」、昇る月や太陽を見ることができたのだろう。維新をむかえ天文方は廃されたが、渋川敬典はのちに新政府の東京天

天文台にも参加した。この地は歴史的にも天文にゆかりがあるのだ。

本校は第一東京市立中と都立九段高からさまざまな遺産を受け継いでいるが、天文台も大きな継承だ。昭和61年の校舎改築の際にこれが設置されたのは明察というほかない。天体観望会の人気ぶりをご承知のとおり。法人九段主催の至大荘での親子の体験プログラムでは、九段高校出身の国立天文台の博士が講師をされている。

校外から天文台を見る絶好の場所を紹介したい。近いところでは北の丸公園内、千鳥ヶ淵が湾曲して、北の丸の崖が西側に突き出しているところ。桜の頃は格別である。最も遠いところでは、およそ1キロの彼方からそれが見える一カ所がある。千鳥ヶ淵の南縁、代官町通りに並行して「千鳥ヶ淵堤塘」が遊歩道になっている。円形の高射機砲台座跡がいくつもあるなか、ある一カ所、ほんの数メートルの間だけ、千鳥ヶ淵のむこうにドームが見える。地上で本校を視認できる最遠の地だろう。ここを知ったときは、カノープスを見たときのようにうれしかった。

千鳥ヶ淵余録

九段に本校舎が建つまでの仮校舎の位置を示すものとして、「第一東京市立中学校発祥之地」の石碑（菊友会による）が半蔵門に近い「千鳥ヶ淵公園」に置かれている。関東大震災後の地図を見ると、たしかにここはそのころから「千鳥ヶ淵公園」であり、そこに学校を示す「文」の記号があった。半蔵濠と内堀通りの間のさほど幅の広くない公園に建てた校舎で4年近くすごしたことになる。

ここを千鳥ヶ淵公園というのは、半蔵濠も元は千鳥ヶ淵だったからだ。明治の後半になって、代官町通りができて濠を分断した。まぎらわしいから「半蔵濠公園」としてしまえばいいのだが。

明治6年の皇居焼失により、長らく赤坂に御所があった。新宮殿が明治21年に造営され、皇居が本当に皇居になって、乾（いぬい＝西北）門が設けられた。代官町通りは、東は竹橋、西は千鳥ヶ淵を分断して内堀通りに通じる御用達の道になった。首都高速の代官町出入口もその用途のものだろう。

この道があるおかげで、「皇居ラン」がこれほどはやることになったのだ。さもなければ九段下、田安門も回ることになるが、「大きな玉ねぎの下」でライブなどあった日には、とても走ってられない。

千鳥ヶ淵の名の由来として、多く「淵の形が千鳥の姿に似ているから」と説明されるが、どこから見てもそのように見えたことはないので同意しかねる。「ちどり」の古語としての第一義は「たくさん鳥」だ。淵の成り立ちからみて、もとは鳥が集まる生態環境だったのではないか。自ら深呼吸のできない堀はさらに強力な人工呼吸が必要だ。せめて桜田濠くらい鳥がくる水質にもどってほしい。

(2020年2月)